

投稿論文の審査過程で生まれた知の帰属に関する一考察

「査読者への謝辞」の問題から

○金沢大学
金沢大学
金沢大学

工藤直志
轟 亮
歸山亜紀

1 問題と目的

本報告では、投稿論文での査読者への言及や投稿マニュアルについて分析し、査読の過程で生まれたアイディアの帰属という問題を考察する。また、査読者の役割や投稿者と査読者のコミュニケーションの様式についても考察したい。

研究成果は学術論文としてまとめられ、専門誌に投稿される。専門誌の査読者 (reviewer) は、投稿された論文を審査し、掲載の許可 (accept) もしくは拒否 (reject) を判断する。研究成果は専門誌に掲載されることで、新しい知識として共有され、評価の対象ともなる。専門的知識の生産において、専門誌の査読者の役割はきわめて重要である。

一般的に、投稿された論文は、投稿者と査読者との (複数回の) やりとりを経て掲載に至る。査読者は、掲載の承諾を判断するだけでなく、修正点や改善点なども査読結果としてまとめる。査読結果を伝えられた投稿者は、論文を修正し再び投稿する。このような過程で、査読者から示唆されたアイディアに従った修正が、投稿された論文の質を大きく高めることが生じうる。このようなアイディアは、どのように位置づけられるべきであろうか。このアイディアは帰属を明確にすべきものであろうか。あるいは、査読者はこのようなアイディアを「提供する」ことは控えるべきであろうか。この問題を、投稿論文内でなされる査読者への言及から考察したい。これは、査読者の役割や投稿者と査読者のコミュニケーション様式を考察する手がかりともなるだろう。

2 方法

査読者への言及の現状を把握するために、社会学及び隣接領域の専門誌に投稿された論文と投稿マニュアル (スタイルガイド) を分析した。近年に公開された論文を対象とし、注、謝辞、付記などで査読者に対してどのような言及がなされているかを調べた。また、論文の作成時に参照されるべき投稿マニュアルでは、査読者への言及について、どのように提案・記載がなされているかを調査した。

3 結果

現段階で整理したデータによれば、査読者への言及には明確なルールが存在しないことがわかった。『社会学評論』では、2001~2011 年度に掲載された投稿論文 196 本のうち 33 本で査読者への言及がなされていた。その内容は、1 本の論文を除き、単に査読者への謝意を伝えるものであった。また、査読者が示唆したアイディアを明記することを指示する投稿マニュアルが存在することがわかった。アメリカ心理学会のマニュアルでは、査読者に単なる謝辞を述べるべきではないとされており、査読者の指摘により生じたアイディアに謝辞を表明する場合には、そのアイディアについて述べた箇所ですべて具体的に言及することが可能となっている。

4 考察

知識生産において専門誌の査読はきわめて重要な役割を果たしている。しかし、査読者への言及を検討する限りでは、科学の原則とされる「知の帰属」に関する基準が、研究者間で必ずしも共有されておらず、査読者の果たすべき役割が明確になっていないとみなせる状況がある。このことは、付随して別の問題も起こり得るため、日本の社会学の専門誌においても、査読に関する何らかのコミュニケーション様式の共有が必要であると思われる。